翻刻『曽根崎模様』（上）

翻刻の会

一、底本には、京都大学附属図書館蔵の七行八十三丁本を用いた。

作者　若竹笛躬、浅田一鳥、福松藤助、黒蔵主、中邑阿契

奥書　豊竹越前少掾、豊竹筑前少掾

版元　鱗形屋孫兵衛、西澤九左衛門

丁付　模様ノ壱・模やうノ二・模様ノ三・模様ノ四・もやうノ五・模様ノ六・模様七・模様ノ八～模様ノ十六・模様十七～模様五十一・模様道五十二・模様道五十三・模様五十四・模様ノ五十五～模様ノ五十七・模様五十八～模様七十四・お初道七十五・お初道七十六・模様七十七・模様七十八・模様七十九ノ八十二・模様八十三・模様八十四・模様八十五終

上演　宝暦十一年（一七六一）五月十八日、大坂豊竹座、座本豊竹越前少掾（内題下）初演

備考　次の跋が最終丁裏に記されている。

干時宝暦十一年已三月上旬より曽根崎新地芝居におゐて八重霞浪花浜荻と申浄瑠璃はかしく十三回忌追善のため興行致候所殊之外繁昌仕続て祇園女御九重錦四月中旬之本出シ是又繁昌仕候ニ付おはつ徳兵衛の昔かたりを仕ルやう御所望の折節京都桂川の心中を早速綴加へ初日出し候所各様の御意に叶ひ益大入繁昌いたし候段偏に御贔屓の余情幾度か外聞を埒ひ日時の移るに随ひ帰期をかぞへ惜事を跋に記す而已

豊竹越前少掾

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1　本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類等では改行しなかった。

2　各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（　）で示した。

3　仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は

「に」「は」「み」とした。

4　漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5　漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6　特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7　畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ヽ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「〳〵」はそのまま残した。

8　文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

9　底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかった。

10　底本中では、九平次の表記が「九平治」となっている場合もあるが、すべて「九平次」に統一した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

岡さつき、佐藤亜美、伯田智美、山田あや、綿貫恵子

文字譜、改行、本文の最終確認は山田和人が担当した。

なお、京都大学附属図書館には、翻刻の許可を御快諾賜わりました。記して感謝申し上げます。

（山田和人）

徳兵衛曽根崎模様

座本豊竹越前少掾

一冊　観音廻りの段　後生にいる物

実やあんらくせかいより。今此しやばにじげんして。我らがための観世音。あおぐも高したかきやに。のぼりてたみのにぎはひを。ちぎりおきてしなには津や。三つづゝとをとみつのさと。ふだ所〳〵のれいちれいぶつめぐれば。つみもなつのくもあつくろしとてかごをはや。おりはのこひめ三六の。（一オ）十八九なるかほよ花。今さきへ出しの。はつ花に笠はきず共。めさずとも。てる日の神も男神。よけて日まけはよもあらじ。たのみ有りけるじゆんれい道。西国卅三所にもむかふと。きくぞ有りがたき。一ばんに天満の。大ゆうじ。此御寺の。なもふりし昔の人も。きのとをるの。おとゞの君が。しほがまのうらを。都にほり江こぐ。しほくみ舟のあとたへず。今もぐぜいのろびやうしに。のりの玉ぼこゑい〳〵。大坂じゆんれいむねに木札のふだらくや。大江のきしにうつなみに。しらむ夜明ケの。とりも二ばんに長ふくじ。そらにまばゆき久かたの。ひかりに（一ウ）うつる我かげのあれ〳〵。はしればはしるこれ〳〵又。とまればとまるふりのよしあし見るごとく。心もさぞや神ミ仏ケ。てらすかゞみの神明宮おがみめぐりてほうぢうじ。人のねがひも我ごとくたれをか恋のいのりぞと。あだのりんきやほうかい寺。東はいかに。大きやうじくさのわかめも春すぎて。おくれざきなるなたねやけしの。つゆにやつるゝなつの虫。おのがつまごひ。やさしやすしや。あちへとびつれ。こちへとびつれ。あちやこちかぜひた〳〵。はねとはねとをあはせの袖の。染たもやうを花かとてかたにとまればおのづから。もんにあげはのてうせんじ。扨ぜんどうじりつたう（二オ）寺。天満のふだ所のこりなく。そなたにめぐるゆふだちのくものはごろも。せみのは。のうすき

手ぬぐひ。あつき日に。つらぬくあせの玉つくりいなりの宮にまよふとの。やみはことはり御仏も。衆生のための親なれば。是ぞおばせのかうとくじ。よもにながめのはてしなく。西にふなぢのうみふかく。なみのあはぢにきへずもかよふ。おきのしほ風。身にしむかもめ。なれもむじやうのけふりにむせぶ。色にこがれてしなふなら。しんぞ此身はなりしだい。さて。げによいけいでんじ。ゑんに引れて。またいつか。こゝに高津のへんめうゐん。ぼだいのたねやうへ寺町の。長あんじよりせい（二ウ）あんじ。のぼりやすな〳〵下タりやちよこ〳〵。のほりつおりつ谷町すぢを。あゆみならはず行ならはねば。しよていくづおれア、はづかしの。もりてもすそがはら〳〵〳〵。はつとかへるをうちかきあはせ。ゆるみし帯を引しめ。〳〵。しめてまつはれふぢの棚。十七ばんにじうぐはんじ。これからいくつ生玉のほんせい寺ぞとふしおがむ。じゆずにつながんぼたいじや。はや天王寺に六じだう七千へよくはんの経堂にきやうよむ鳥のときぞとて。よそのまつよひきぬ〳〵も思はでつらきかねのこゑこん。こんだうにかうたうや万どういんにともす火は。かげもかゝやく蠟燭のしん清水に。へしばしとて。やがてやすらふ。あふ坂のせきのしみづをくみ（三オ）上ゲつ。手に結び上ヶ口すゝぎむみやうの酒のゑひさます。きゞの下風。ひや〳〵と右の袖口左リの袖へ。とをるきせるにくゆるひも。道の慰あつからずふきて。乱るゝうすけふり。そらにきへては是も又。ゆくゑもしらぬ。あひ思ひぐさ。人忍ぶ草道くさに。日もかたふきぬいそがんと又立出る雲のあし。時雨の松の下寺町にしん〳〵ふかきしんかうじ。悟らぬ身さへ大かくじ。扨こんたいじ大れんじめぐり。〳〵て是ぞはや。卅ばんに。三つ寺の大じ大ひを頼ミにて。かくる仏ヶの御手のいと。しらが町とよくろかみは恋にみだるゝまうしうの。夢をさまさんばくらうの。こゝもいなりのかみ社仏神すいはのしるしとていらかならべし新御霊に。おがみ

納る（三ウ）さしもぐさ草のはすはなよにまじり。卅三に御身をかへいろで。みちびき情でおしへ。恋をぼだいのはしとなし。わたしてすくふ観世音ちかひはたへに。三重へ有りがたし

二冊　生玉の段　無実に入ル物

曇る日も押照里に生玉の。光カり和らぐ鳥居さき。茶店の暖簾ふうはりと乗て。浮して打囃す。軒に小坊主万歳と。所の貴賤旅人の足引留る咄売リ。女太夫の声迄もいとなまめきて聞へけり。

中に取リ分ケ神ン崎屋けふ始メての田舎客。稲田杢兵衛ほろ酔機嫌。コリヤナニたいこの頓作とやら。そなたや爰なよね達が願ひには。天満の小山屋（四オ）稲荷山はふたん行ので気が替らぬ。道頓堀か生玉にせろ。そんならおはつも観音廻グりしたいといふ。幸に爰へ来て一所に遊ぼと思ふたに。お初は草臥奥に寝て居る。心淋しくてならない。何ぞ又外に面白い慰はと。いふに頓作。イヤ申万歳を見せましよかい。ホンニそれ〳〵私らもと。皆うき立ば。ソリヤよかろ。身も万歳に未御意得ぬ。いざまからふといふ波に。牽頭中居の友千鳥ざは〳〵伴ひ行跡へ又も一むれうかれくる。

今出川の雑掌片岡幸右衛門。大坂逗留鬱散の伽にいさなふ柏屋小はる。中居まじくら一僕連レ。ゆら〳〵来るを女子共。サア〳〵是へサアこちへ。お這入リなさんせ〳〵。（四ウ）ヲ、サ〳〵這入レといはいでも這入にやならぬ。シタカ奥ふかい座敷はないか。アイ〳〵離座敷もござります。サアかふお出と先キに立。下女が案ン内に打連レて奥の一間に入にけり。

浮名をよそに。洩さじと包ム心の内本町。こがるゝ胸の平野屋に。春を重ねし雛男一トつなる口桃の酒。柳の髪もとく〳〵と。呼れて。粋の名取川。今は手代と埋木の生醤油の袖したゝるき。恋の奴に荷はせて。とくゐを廻り生玉の。社にこそ

は着にけり。
出茶屋の奥より女の声。アリヤ徳さんではないかいの。コレ徳さん〳〵と手をたゝけば。徳兵衛合点し打点き。コレ長蔵。おれは跡からいの程に。そちは寺町の久本ン寺様。長久寺様上町から屋敷方一遍廻つて内へいにや。（五オ）徳兵衛もはや戻るといや。ソレ忘れす共安土町の紺屋へ寄つて銭とりやや。サア〳〵早ふとせり立れば。コレ徳兵衛様。ヱ、聞へませぬぞへ。何ぼ隠してござつても皆よふ知て居ますはいの。アノかたくなゝ旦那殿が。此徳兵衛はどこへいた。又出おつたかといはしやるのも。イヤたつた今そふかふと。年寄ッた親方へ嘘計で間を合せ。夫レに何じや心を隔。ア、儘よ儘のかは。人はとも有こつちの心。早ふ去ンて内の首尾。取繕ふてやりましよと。寺町さして別れ行。
徳兵衛はそろ〳〵と。簾の傍へ立寄て。お初じやないか。コレハどふじやと編笠を。ぬがんとすれば。ア、先ッやはり着て居さんせ。けふは田舎の客で卅三番の観音様を廻りまし。（五ウ）爰で晩迄日暮シに。酒にするじやとぜいいふて。万歳を見に夫レそこへ。戻つて見ればむつかしい。駕も皆知らんした衆。やつぱり笠を着て居さんせ。夫レはそふしやが此比はなしも礫もうたんせぬ。気遣ひなれど内方の。首尾をしらねば便宜もならず。ほんに又余ンりな比わしはどふ成らふ共。聞たふもないかいな。おまへは夫レでも済モぞいの私は病イに成はいな。嘘なら是此痞を見さんせと。手を取て懐の打恨たるくどき泣。ヲ、道理〳〵。去リながらいふて苦にさせ何せふぞ。此比おれが憂苦労。盆と正月其上に十夜お祓煤はきを。一度にする共かふは有まい。心の内はむしやくしやとやみらみつ（六オ）ちやの皮袋。金事やら何しややら訳は京へも登つて来る。よふも〳〵徳兵衛が命は続の狂言に。したらば哀に有らふぞと溜息ほつとつく計。

ハテ軽口の段ンかいな。夫レほどにさへない事も私に包まずいはんすに。隠さんしたは訳があろなぜ打明て下さんせぬと。膝にもたれてさめ〴〵と涙は。延紙をひたしけり。ハアテ泣やんなうらみやんな。隠すではなけれ共いふても埒の明ヵぬ事。併大方済ミ寄ッたか一部始終を聞てたも。おれが旦那は主ながら。元が現在伯父甥なれば懇にも預ヶる。おれも又奉行に是程も油断せず。商イ物に文字ひらなか違へた事の有らばこそ。此正直を見て取て（六ウ）在所に居る内義の姪と女夫になし。商させふといふ談合。姪の祖母様かこちへわせ親方と談合で。拵料三拾両の金を握つて帰られしを。此うつそりが夢にもしらず。跡の月からもやくり出し。押シて祝言させふと有。そこでおれもむつとして。ヤアラ聞へぬ旦那殿。私合点致さぬをうちはで相談極マるとは。あんまりなされやう。今迄様に様を付ヶあがまへたアノ姪御。一ッ生女房の機嫌取此徳兵衛が立物か。いやといふから甲が舎利いつかな〳〵いやでござると。詞を過ゴす返答に。親方も立腹せられ。おれが夫レも知つて居る。蜆川の天満屋のはつめとやらにくさり（七オ）合。嗅が姪を嫌ふよな。是非にいやと思ふなら商事の勘定せい。真裸にしてまくり出し大坂の地はふませぬといからるゝ。おれ迚も男の我。何の其出てくれふと。勘定を仕て見れば小弐貫目ほど不足に成ル。どふも思案に落なんた折柄ふつと気の付たは。わがみの母御の所から拝ましに来た渡唐の天神。宝ラは時のさし合せと。そなたも知つた油九に入訳ヶいふて掛地を預ヶ。金三拾両借ッて来た。ソレつき立れは能物を。不足たけを儲ふと思ひ。仕馴ぬ現銀店へいて。其三拾両ぐはらりと仕廻。南無三宝と思ふたに京の兄貴か借てくれられそれで大方（七ウ）事は済ンだれ共大坂に置れまい時にはどふして逢れふぞ。たとへ骨はくだかれて身はしやれ貝の蜆川。底の水屑とならばなれ。わがみに離れどふせふとむせび。入てぞ泣居たる。おはつも供にせく涙。力ラを付て押とゞめ。扨々い

かい御苦労。皆わしゆへと思ふに付嬉し悲しう忝し。去ながら心慥に思召。大坂をせかれさんして盗ミかやきの身ではなし。どふして成と置ク分ンは私が心に有事也。逢に逢れぬ其時は此世計の約束か。死るを高の死出の山。三途の川はせく人もせかるゝ人も有まいと。気強ふいへど目は涙思ひに沈ムぞいぢらしし。

蚤取眼で箱根の三ぶ六。ヤアおはつ爰にか。ヲ、兄様マア何としてござんした。イヤモ何と（八オ）は無用〳〵。朝飯腹でうろ〳〵とわかみに引れ善光寺参り。よつ程観音めぐつて来た。サテ高がかふじや知つての通り長々の腫病ィ。敦阜丸と麦飯のお影で漸〳〵人には成たれど。だいなし喰ハれぬ様に成リ。在所の母者へ無心に往たら。金といふてはみぢんもない。先度お初にやつて置た雪舟とやら。殺生とやらの渡唐の天神。夫レをとふなとせいといはれた。ヱ、何の役にも立ぬ物と。ぼやき〳〵帰りがけ去ル医者殿に咄したら。ワリヤ大切な掛物。幸病家の福仁か兼々望で居やる故。金卅両には売てやろと。聞よりおれは恂りし夫でわがみを一遍尋た。サア其掛物出してたも。今じや〳〵今（八ウ）ほしいと。かみ付様にせり立られ。お初ははつと思ひながら。コレ兄様ちと跡先も思はんせ。観音廻りに其掛物肌に付てあるきはせず。今といふてどふ成ロふ。イヤ〳〵〳〵。買といふた医者殿の口の明た時でなけりや。サアそふじや迚今爰には。イヤサないでは済マぬ。掛地かなくば金おこしやと。無理押シに出る横車胸に轟く計也。

徳兵衛見兼。コレ三ぶ六殿とやら。其掛物を戻しましよ。ヤアこなたが掛地を。ヲ、成程と請合詞。コレ徳兵衛様ン。ソノ掛地は。ハテ扨了簡有ての事。金は京の兄貴に囉ひ。拠ない義理合で去人に借て置キ。此間に請取筈を間違ふてけふ切の約束。其金で掛物を九平次より取戻せば。波風なしにさら（九オ）りと済ムと。聞てお初がコレ兄様。モウ手に取たも同

しこと。少ト の間待しやんせ。ホウ扨はこなたが徳兵衛殿か。お初に訳ヶの有様子聞て居ながら逢たは今。若い者の事じや程に何かの事を頼ます。彼是いふも私は其掛物さへ請取りやよごんす。時の不肖じや待チましよと。簾がこいの床机の上。腰打かけて居る折から。

油屋の九平次は河内屋伊兵衛伴ふて。跡にのら〳〵京屋の仁郎次。徳兵衛見るより。ヤア九平次。ホウ徳兵衛か。ヲ、九平次様。コレハしたりお初女郎。二人連レてさへるの〳〵。おいらもけふは塩町の伊勢講。ア、モ下戸の平しゐにほつとした。トレ一休と腰打かくれば徳兵衛指寄。ノウ九平次。たつた今貴様の内へ往く所を幸じや。いつぞや世話に預ヵつた雪舟の掛物。請取ル金が（九ウ）出来た故利も相応に。ア、コレ〳〵〳〵。わがみとおれが中ヵに何の利端所じやないはいの。晩ンにでも元ン銀持て其掛物を。イヤコレ〳〵夫レがちと急に入ル。ならふ事なら今ほしい。ヤア〳〵夫レはかべに馬。しやがノウ河伊。今聞きやる通じや大義ながらこちの内へ。ヲ、其掛物取ッて来いか。コレ此中着に鍵が有。店の者にそふいふて。ソレ戸棚の小引出しじやぞや。ヲ、サ皆迄の給ふなと。元来し道へ引かへせば。仁郎次は跡を打詠め。ア、おりやちつくり眠けがきた奥で一ト息キ。ソリヤよかろおれも相伴サアおじや〳〵。徳兵衛後にといひさして。胸のやりくり手つがひもよしずのへ内へ入にけり。

南の方より茶屋の男。申お初様。御客様は万ン歳見て夫レから西照庵あれへおこしと迎ひの駕サア〳〵お出とせり立る。ア、そんならいかざ成ルまいなア。コレ（十オ）徳兵衛様晩にかならずコレ〳〵〳〵お客が待ッてゞ有ロぞいの。何かの事は晩に咄そ。マア〳〵早ふいきやいのと。いへと互の水放れ名残おしげに出て行。

人は心の直焼キ刃武士とは見へて町風にさのみ目立タぬ供を連。武の内長右衛門用事有げに歩ミくる。
ヤ申〳〵兄者人長右衛門様。ホウ徳兵衛か是は〳〵。先比上京召さつたげなに遠方へいた留主の中で。ハア夫レ故何かの御咄はお絹様迄。ヲ、女共に聞た〳〵。扨今ン度俄カに下タつたはそなたも知ッた今出川家のお姫様。西国方へ御婚礼の用事。併今朝迄に相済ミ京都へも書状を出した。誠にソレ先キ達ッて下せし金は。片岡幸右衛門殿といふお侍を頼ミ。言伝てやつたるが。成程〳〵請ケ取リましてござります。ホヲ身（十ウ）共も其幸右衛門殿に逢ィ度。旅宿ヶへ向ケていた所。此辺へと聞ィたゆへ直ヶに爰へ尋ねにきた。夫故伯父者人へも得見廻ハぬ。此段宜しういふてたも。コレそなたも随分そくさいでと。たまに逢ても兄弟は。むつまじげなる挨拶なり。
後の方よりざは〳〵と。騒連レたる幸右衛門。手を引小春仲居のおせん。ソレハお前のきつい御無理。ナンノおれが無理いはふ。イヱ〳〵無理じや。イヤ〳〵と。だゞ付クうちに土手助がソレシイ〳〵と気を付れど。ヤしいでもはいでも望にすると言つゝべつたり。ヤア長右殿。コレハ〳〵幸右衛門様。サテ御存の御用の筋ヂで逗留も致すに付。難波橋辺ンで座敷を借リ御出先キを尋ねましたによい所で。イヤ申アノ女中はどなたでござると。問かけられて返事にこまり。イヤナニ物てござる（十一オ）此女性はア、ヲ、剣術師匠の秘蔵娘。ア、中々立合が上手でござる。コレハ〳〵左様ならば手前もけいこにちよつと只今御相手に。ア、コレ〳〵今日は先ッ御無用〳〵拙者先刻クよりけいこ致。アノ娘御もきつい草臥。コレ〳〵お女中。御師匠にも嘸御待チ兼早ふ〳〵と目遣ひに。そんなら御暇サア〳〵と。小春を始メ惣々が。きへ入し気も生玉の坂口さして別カれ行。

能折からと徳兵衛立出。ハア幸右衛門様最ィ前ンからお咄半ゞ見合しておりましたちよつとお目にかゝりたい。ホウ徳兵衛某に逢ィたいとは。ハイ此比御用立チました金子をお戻し下さりませ。ヤア何ニが何ンと。サア先月お借申シた三拾両。ヤコレ〳〵徳兵衛ソリヤ何いやる。其三拾両の金は長右殿よりそなたの方へ。届ケくれいと言伝られ。ソレ覚へが有ふお身が店の帳のきはへ東向キに居つて何やら書ィて居やつた時。金子渡し（十一ウ）て請取リかゝせ直に兄貴殿へ登した。ソレニ何ンじや金渡せ。コリヤお身は無実を言ィ掛るな。ヤアコレ申シおつしやるな。河内や伊兵衛へ戻ドさねば武士の立タぬ事が有たつた一日二日の間取リかへてかしてくれと。我レ等ふぜいに手をついて御頼ミ有ッた笑止さに。御取リかへ申シたれば。証文を書ィてくれ判ンを仕ふと有ッて是証文取てかした金。サアお渡しと懐ロより。一ッ通取リ出し指シ付クれば。幸右衛門はいぶかしげに読ム証文を長右衛門。ためつすがめつ見る内に。河伊は息キせき。コレ〳〵九平次。掛ケ物取ッてきたぞやと。わめきちらしておくに入。

幸右衛門は証文握りヤイ徳兵衛。ワリヤ恐しい工をするな。コレ此証文に有ル判は跡月廿五日の暮レ方。白地の錦の紙入レぐちおとし。諸方へ張紙せんぎの最中。扨はそちが紙入レひらひ。かふした証文拵ェておれをねだる思案ンと見た。其証拠にはコレ証文ンの日付ケは三月（十二オ）廿九日。ヤイ廿五日におとした判ンが廿九日に押サれふか。こんな衒をせふよりは盗ミをせいとまが〳〵しふにらみ付れば気をもみ上ケこぶしを握り牙を嚙。ハア扨工ンだり〳〵。一ッぱいくふたが無念ンやな。おめ〳〵金をかたられながらかふ工ンた事なれば。でんどへ出てもおれが負ケ。モウ徳兵衛が百ク年ンめ犬侍ィめを相手にと。摑ミかゝるをかけ寄ッてヤレ早ャまるかと押しづめ。コリヤ徳兵衛能ク聞。そちは現在此長右衛門が弟。其弟に恥つら

か、せじつと見て居る兄が心どの様に有ふと思ふ。コリヤ是はナ三拾両に目がくれて。そちが工ミといふ事は。此黒イ眼コで見て置イた。イヤサ夫レでも此証文。サ、、、、其証文も今では役に立タぬ。ガ時節も有ふ。ナコリヤ夫レに今幸右衛門殿に手向ヒせば第一兄がおちどと成ル。我レ町人（十二ウ）の身ながらも中将様のお預ケにて。御用の節は此ごとく大小御免ン。其弟が過ちと御聞に達すりやコレ。此刀で兄は切ッ腹。そちも犬死ニ。ナ申シ幸右衛門様。ア、いかにも左様。イヤ若い者の事金故かふした不埒も有リ内。コレ徳兵衛向後余義なき入リ用有ラは。五両や十両はハテ此幸右衛門がかして遣ふし。此場の事は長右衛門殿に対し隠便に仕てくれふさ。イヤ何かの中に日も晩ン景土手助来れ。ナニ長右衛門いざ同道して帰りませふ。成程御供仕らん。コリヤ徳兵衛も早かへれと。善と悪とは見へながらいはぬ色なる山吹の。小判の。さたも夫レなりに旅宿へ、こそはかへりける。

床机をおりて箱根の三ぶ六。ヤア徳兵衛。此しだらなら。千年ン待ッても埒や明クまい。是からおはつが所へいて。年ン切リますより外カはないと。言捨出る葭簀の内。

コレ兄貴殿待タれいと。呼ミ留メら（十三オ）れてふりかへれば。九平次は箱脇挟ミ。サア徳兵衛今取リ寄セた此掛物。三ぶ六殿とやらへ渡して。男の一分ン立やいのと。思ひがけなき挨拶に。徳兵衛は額を上。ホウ九平次志は嬉しいが。三十両の当がない。ハテ扨々金のない訳はさつきにから聞イて居る。おれも男じや金は入ぬ。コレ此箱は封も其儘。サア請取レとさし出せは。ハツア忝い。此恩ンは一生忘レはせぬと。箱取上ケて押シ載き悦ひ余りて見へにけり。

三ぶ六立チ寄リコレ徳兵衛。載イて計リ居ずと。戻す物をドレ早ふと。言に九平次ア、コレまあ待ッた。互の念ンじや徳兵衛

証文。ヲ、尤書キましよと。やたての筆を喰しめす。ア、コレちと文ン言ンに望が有ル。小口はしれた銀証文。慥に請取リ申候迄かきや。ヲ、よし〳〵。是はマア此一軸の代の事しや。然ル上は天まやお初。ふつ〳〵思ひ切リ候所実正也。御勝手次第其元の。女ぼうになさるべく候。イヤコレ〳〵九平次。そんな手形は（十三ウ）書れまい。やつぱり常の預カり。イヤ〳〵〳〵。此文言にかきやらねば。此一軸もよしにせふと。箱取リ上るを河伊が引キ留。マア気短ふいやんなと。宥メる内に京仁がコレ〳〵徳兵衛。わるい合点ンじやぞや。金さへ戻しや。証文は何ン時キでも取リ戻される。どふ書イてもだんないと。言に徳兵衛アいか様と。手早に認め。是でよいか。ドレおつとよし〳〵。イヤ何河伊京仁。いちやむちやてゑいが覚。どふやらいぬる拍子が抜ケた。どこそで一ッ盃呑ミ直そ。徳兵衛。其内逢ふと言イ捨テて。肩臂いからし別レ行。

三ぶ六は伸欠。ア、テモ長ふ待タした事去リながら。マア嬉しいと。言つゝ箱のふう押シ切。一軸を取出し。マア〳〵〳〵。こりや掛物がちがふた〳〵。トレ〳〵と徳兵衛もさしよつて。見れば得しれぬ藪天神。松の緑青禿廻ハり。梅もしらけし店ざらし。三ぶ六大きにむくり出し。ヤイ〳〵〳〵〳〵徳兵衛やい。さつきにから聞イて居りや。すつきり己レが手くら計。こちの掛地は（十四オ）親重代。母者が天神〳〵といはれたれど。おれが見たが。天窓に坪をかづき。模様の有ル衣をきて。渡唐の天神といふ唐の男の絵じや。夫レにこんな贋物渡し。恟り頬は何じやいと。箱おつ取ッてばつた〳〵。ぶたれる下タに摺寄〳〵。ア、是腹立は道理ながら。おれはみぢんも覚がない。コリヤ九平次めが工事。何ンでも誠の掛物を取リかへしこなたに渡タす。暫ク待ッて下されと。断言へは箱投捨。ヱ、あたけたいな事なれど。今ン夜中はまつてやる。明日は早々代官所。われが町へも断ぞと。睨。ちらして立かへる。山寺の春の夕暮きて見れば。先なはヤア。九平次。我に逢

ァと待ッて居た。ヨウこんな物つき付ケたと。一軸取ッて投ケ付れば。九平次は空とぼけ。マア何ンの事じゃ。ヤ何言ァのじゃ。ヤア何の事とはコリヤ。最前戻した此掛物。どふやら封がちがふたと。思ひながら懇意な中。別にちがひは有ルま（十四ウ）いと。開いて見ればまんざらの贋物。サアおれが預た誠の絵を。戻せ〳〵とせり立れば。九平次はけら〳〵笑ひ。ヤイごくどうめ。ヤイ封が違ふて有ッたらば。なぜ其時に改めぬ。そつちで贋物拵へて。おれにかづける横道者。色々のばか尽しおると。睨付ケたる顔付キは。けんによもなげに見へにけり。

徳兵衛くはつとせき上し。ヤアいふな〳〵九平次。最前おれに情らしう。アノ一軸をかへしたは。証文取ふ計じやな。何ぬかす狼狽者。銀も取ずに質物をかしてやる此九平次。証文取ふ計とは。ドレどのほうげたからぬかしたと。ほふべらぴつしやり。何とする。儕レにぶたれて居よふかと。むしやぶり付クを仁郎次と河伊。ヤア言かけするかんどうめと。徳兵衛一人リに立かゝり目鼻も分ずたゝき合。多勢にふ勢徳兵衛を踏ず擲いつする所へ。

来かゝる稲田（十五オ）杢兵衛が跡に舁くる駕の内。ヤアあれ徳さんじやと顔見合せ。おはつは身も世もあら悲しや。コレ駕の衆頼ますアレ徳様ンじやと身をもがく。客は元より田舎者怪我が有てはならぬぞと。無体に駕へ押入レる。コレのふ待て下さんせノウ悲しやと泣声計。急げ〳〵と一ッさんに。駕を早めてかへりける。

徳兵衛は只一ト人九平次は三ッ人連。あたりの茶やより棒づくめ。蓮池迄追イ出し。誰レが踏やら擲やらさらにわかちはなかりけり。

髪もほどかれ帯もとけ。あなた。こなたへ伏転び。ヤレ九平次め。儕レ生ケて置ふかと。よろぼひ尋廻れ共。にげて行ゑも

見へばこそ。其儘そこにどうどふし。大声上ケて涙くみ。いづれもの手前。面ン目クなし恥かしし。全此徳兵衛が。言かけしたるでさらになし。日比兄弟同然に語し（十五ウ）やつが事といひ。男気な者と思ひ過ゴし。預ケし箱の封印を。改めぬが我誤りまざ〳〵道理を持チながら。かへつてかゝる踏てうちやく。男も立タず。身も立タず。ヱ、最前につかみ付。喰付イてなり共しなんず物と。大地をたゝき歯がみをなし。拳を握り歎キしは。道理共笑止共思ひやられて哀なり。ハツアかふいふても無益の事。此徳兵衛が正直キの。心の底のすゞしさは。三日を過ゴさず大坂中へ申シ訳ケをして見せふと。後にしらるゝ詞の端。何れも御苦労かけました。御免ン有レと一チ礼のべ。破れし網笠。拾ひ着て。顔もかたむく日影さへ。くもる涙タにかきくれて。すご〳〵。帰る有様は。目もあて。られぬ三重へ風情なり（十六オ）

三冊　天満屋の段　障子に入物

へ恋風の。身に蜆川。流レては其うつせ貝現なき。色の闇路を照せ迚。夜毎に燈すともし灯は。四季の螢よ雨夜の星か。夏も花見る梅田橋旅の。雛人地の思ひ人。へ心〳〵のわけの道知ルも迷ばしらぬも通ひ。新色里と賑はしし。むざんやな天満屋の。お初は内へ帰りてもけふの事のみ気にかゝり。つきぬ涙の物思ひ。傍輩のおやなおそよぞめき待ッ間の慰は。手飼の小猫てふらかすきせる小よりを取ゞに。ノウコレ初様。お前は何も聞んせぬか。今も京才で咄が有ッたが。徳様は何やら訳の悪ルい事で。たんと擲れさんし（十六ウ）たげなサイナけふ阿波七でもお客の咄し。似せ判とやら衒とやらで。相手が縛つていんだといな。アゝもふいふて下んすな。聞ば聞程胸痛私から先へ死さふな。いつそ死んでのけたいと。泣より外の事ぞなき。座敷から出る下女の玉。コレ〳〵おそよ様おやな様。お三人共奥へお出と。いふにおしげ

がコレそなた衆。アノ御客はねち上戸。必酒を過ゴしやんな。ドレ〳〵。挨拶がてら私もいこ。サア〳〵おじやと先に立。伴ひてこそ入にけり。

門は小歌や浄留理で引もちぎらぬ。宵ぞめき。除てとぼ〳〵小挑灯爰かそこかと覗く内。コレナ申おはいりなさんせ〳〵と言つゝ玉は走リ出。コレ親仁様。どんなお顔が物ずきじや。サアマアおはいりなさんせと。引込ばヤアコレ待ッ（十七オ）しやれ。アノ天満やといふは爰か。アイ〳〵。振袖も有リ。詰メも有十四五から卅迄。年も器量も好ながごんす。恋知リのお初様ン迚此町一チのぼつとり者。ア、コレ〳〵。其初といふ女郎に。逢て問たい用が有。ハア扨は徳様ンのお連レ様じやな。コレ申お初様。徳様のお連様がお前に逢たがりなさんすぞへ。ヲ、お連レ様とは誰レさんじや。逢て問たい事も有こちへおはいりなされませ。ア、然らば御めんなさりませと。挑灯消て内に入。上る間待チ兼傍に寄リ。終に御一座致さねど。お連様ンなら生玉での入リ訳ケも。定メて知ッて御ざんしよ。私もどふぞ徳様ンに。逢ねばならぬ事有ッて。待ッて居れど見へませぬが。ござる所を知てならいふて聞（十七ウ）して下さんせと。尋られて恂り顔。コレお初殿。おれは其徳兵衛が。有所をこなたに聞にきたのじや。エ、。お前はマア誰様じやへ。ア、平のやの久右衛門迚。徳兵衛が親方でござると。聞てお初はハツト計リ。顔赤らめて差うつむく。

久右衛門押シ直り。コレお初殿。ヱ、こなたを見るも恨めしい。アノ正直な徳兵衛めを。どないにだまし込しやつたが。魂が入替り皆は夜泊日泊リ。此様にして囉ふては身上が立ぬはいの。本ンに何から言ふやら。コレ親方と言ながら。徳兵衛めとは真実の伯父甥。殊におれが子迚はなし。今迄の性根なら釜の下の灰迄も。あいつにやりたい心から。女房の姪に

北といふを。在から呼ンであてがふても。じや高のはねる（十八オ）様に相莚も踏おらぬ。是といふもこなた故。嫁はお
れが知た様に。不足をいふていのといふ。いなしては世間ンも立ず。いよ〳〵あいつが名が出ると。心一トつに苦をやまし。
あげくにけふも朝飯過ギ。得意廻りに出おつてから。今に成レど戻らぬ故。いつそ放兼吸付ィて居ルならば憎いながらに落
付ケど。若も詰らぬ事が出来。無分ン別でも出しおろかと。夫レ案ンじれば内にも居られず。待チ兼て尋にきました。どこぞ
こなたの知ッて居る。小宿でもござらぬかと。恨詞はどこへやら。甥子が身の上気遣ヵひの目もうろ。〳〵と成ければ。お
初は涙にくれながら何事も皆わし故。お北様ンの入訳も咄シに聞て居ますれば。私が憎いは御尤。（十八ウ）何かの訳ヶは知
ながら思ひ切ルにも切ラれぬは。ふたりが因果と思召シ。堪ン忍して下さんせ。今朝とふ出からいなしやんせぬと。聞ヶば聞
程気遣ひは。去ル侍に徳様が男づくの義理合ィで。金卅両借さんしたを。今に成ッて借らぬといふ。手形を出して見せたれば。
此印判は跡の月落トして諸方へ張札した。扨は拾ふて此様に。似せ手形書キ押シたのじや泥坊の衒のと人立多き生玉で。九
平次ぐるめ大勢が。寄ッてか、つて徳様を。ふんだり蹴たり仕おつたと泣々語れば久右衛門。ナニ九平次めも一つとや。徳
兵衛は我甥といふ事。誰しらぬ者もないに。あいつらに打擲させ。此久右衛門が立物かと。勢ひ込ンで駆出すを。（十九
オ）お初は引留コレ申シ。気色をかへてどうぞいな。ヲ、九平次めが宿へ行。其侍ィめを尋出し。存ン分ンにせにや置ぬ。
ア、コレ〳〵マア〳〵〳〵待しやんせ。お腹の立ッは道理ながら。先キには工んでした事じや。此上麁相の有ル時は御損の上
の恥になる。そして今夜はどの道にも徳様ンが見へませふ。マアとつくりと聞定て。ホウ徳兵衛が是非共に。爰へ来る約束
なら。おれも逢ふての上の事。ガ夫レ迄爰を借シて下され。ヲ、何の御遠慮なさるゝ事。マア奥へいて待てござんせ。コレ

お玉殿。此お方を小座敷へと。眠転し下女を呼。指図に気の付久右衛門。ヲ、夫レ々我も人も覚の有ル事。商内見せをふさかれるは。大分ン小腹の立物じゃ。イヤかふしましよ。買ィ始メの買納メ。（十九ウ）お山独買ィませふ。ヤコレお玉とやら。爰のお山殿の直段はいくらじゃ。アイ三寸五ぶと四寸でごんす。ヤア。そんならアノ。客の何ンぞを指て見て売ルのか。ヱ、どんな事いふおさんじゃ。しゆらい込四匁といふのじやわいな。ハア其しゆらいとは何の事じゃ。ヲ、しんきやの。アノ夫はな。酒や肴や蛸やかまぼこ。喰のみ仕ての事いな。ホウそれは安い物。お山はどれでもかまやせぬ。秤借してと懐中より。紙入レ出せば初は傍から。ア、もふよしなされませ。何のそないにかたくろしう。アイヤ〳〵さふじやござらぬと。いふ内秤持チ出せば。コリヤ善四郎じゃの。くるいはないかとためて見て。さつきにから店ふさげた。二タ座敷分ン買ましよと。小間銀あれ是入レ替て。ヱ、とつくり（二十オ）とはかけ合ぬ。ヤコレ〳〵八寸一ぶりんと有ル。釣を七文ンおこさつしやれと。銀を渡してノウお初殿。徳兵衛がきたら。其儘おれに知ラしてやと。下女が案内に打連て奥の。一間へ入にけり。

お初は跡につく〴〵と案ンじに胸もかきくれて。涙に沈む折からに。夜の編笠徳兵衛が思ひ侘たる忍び姿。夫レと見るより飛立計。走出んと思へ共内には亭主料理人。目がしげければ悟られしと。ア、いかふ気がつきた。門見て来ふとそつと出。徳様がお初。ノフ是はどふぞいの。噂取々聞度に其気遣カひさ逢ヲたさで。気違の様に成て居たはいのと。笠の内へ顔さし入。声を立ずの隠し泣哀。はかなき恋路なり。

男も涙にくれながら。（二十ウ）聞きやる通りの工なればいふ程おれが非に落る。其上四方八方の首尾はぐはらりと違ふて

来る。最早生ても居られねばとんと覚悟を極た故。若もそなたに逢れずば。心のたけを知そふと。コレ此状を書てきたと。渡す折から内よりも。世間ンに悪い沙汰が有。初様ン内へはいらんせと。声々に呼立る。ヲ、〳〵アレジヤ何にも咄されぬ。わしがする様にならんせと。襠の裾に隠し。はふ〳〵中戸の沓ぬぎより。掾の下に忍ばせて。上り口に腰打かけ。たばこ引寄吸付て。そしらぬ顔して居る所へ。花の都にサイナ。川原に船が。あらば涼に乗で有ロナアヱ、。ヲ、ヲサイナ。有ラば涼ミに乗ルで有ロナヱ。うたひちらして（二十一オ）町一ぱい。広がる油屋九平次は友の悪者河内屋伊兵衛。座頭の筆都引連レて。ざんざめかして入来り。

ハアコリヤお初隙さふなの。亭主〳〵と横柄顔。ハア油九様ヨウ御出と。有べかゝりに庄兵衛が挨拶。ホウきつう店が淋しさふな。客に成ッてやらふかい。ア、懐が重ふて歩行にくひ。久しう銀子といふ物まかぬが。今夜はまいて見よふかと。紙入明ケて壱歩小玉を。ばら〳〵こぼせば河伊が見兼。コレ油九。いかに沢山持た迚。畳は銀子のはき溜じやと。聞て出て来る下女の玉。コレ油九様。私に何ぞ用はないかへ。ヱ、煤はきに拾ふた。人形の様な頬じやたどんの黒の芸子によふ似た。少せんだく（二十一ウ）せい〳〵。アイ〳〵サイナせんだくせふものりけがない。ドレのり買とそこ爰へ。こぼした小玉拾い取リ。コレ初様も来てお盃をなさんせ。イヤ私しや酒はいやじやはいの。コレお初の君。其様に位いどらずと。少付合ふて囉ふと。九平次立寄手を取は。ヱ、なめたらしい置ヵんせと。持たきせるで顔ぴつしやり。アツ、〳〵。九平次様あつごんすか。イヤあつうても能あつい。お初のいやなら。コレ亭主一トつのみや。珍らしい肴をせふ。きのふからはやり出し。面白い踊が有ル筆都引ケ〳〵河伊も踊りや。お初しく〳〵サイナ。泣顔かくす。かあい徳兵衛がどろぼ故ナアヱ、。ヲ、

ヲ、サイナ。かあい徳兵衛がどろぼ故ナアエ、。何と能イ文ン句で有ふか。したが此訳ケを（二十二オ）知ルまいの。コレいふて聞す能聞きやや。アノ初が一チ客平野屋の徳兵衛めが。金卅両借シてくれとなく様に頼んだ故。早速借シて遣ッたれば。済ム迄の質物にと。掛物か何じややら箱に封付ケおこしたれど。三十両や五十両の目くさり金に。質は入ラぬとかやしたじや。サテ是から徳兵衛が。謀反悪事の根元始リ。其掛物が違ふたとおれをねだりおつたが。封の儘戻した故中は何やらこちやしらぬと。夫レから何か調へたら。きやつが衒に極マつて。ゑらいめに合したと。いふを河伊がひつ取ッて。サアまだ又余所のお侍が。落した印判拾ひ取似せ手形書其判で。借シが有と言かけたが是も工の尻が割。ひどいめに合おつたノウ九平次。ヲ、サ〳〵（二十二ウ）向後爰らへきおらふと必由断せぬが能イ。寄セる事も入ラぬ物。どふで野江か鳶田物と。二人が寄て譏口。掾の下にて徳兵衛は歯を喰しはり無念がり。出よふとするを見せまいと。足の先キにて押シしづめ。早い〳〵となだめ居る。亭主は久しい客の事善悪の返答なく。コレ〳〵何ぞ吸物と言イ紛らして取あへず。九平次はコレお初。今の早い〳〵は何じや。サア早いか遅ひか人の恨。報はいで何とせふ。徳兵衛様の御事は振袖からのなじみにて。幾年セ重心根を明カし明せし中成ルが。夫レは〳〵いとしげに微蜜も悪ル気のない御方。頼もしづくが身のひしと。其様にぎろ〳〵しておるどんずり共。アノ盗人共。どんずり共めにだまされさんした物なれど。証拠（二十三オ）なければ理も立ず。世間ンへ顔も出されねば死しやんせいで何とせふ。じたいマア徳兵衛様があんまり正直キ過キた故。アノどんずり共の根性を主の心と同し様に。思はんしたが身の破滅。どふぞ又生キ存へ此仕かやしをせふといふ。能イ思案でも有事か但シどふでも死のか。心の底が聞たいと足にてとへば徳兵衛は。足首取て咽を撫。自害をすると知ラすにぞ。ヲ、そふで有ロぞいな。いつ迄生て

も同じ事。死で恥をすゝがしやんせ。したが一人死しはせぬ。付て死ル者もござんしよ。未来迄も一所ぞやいのと。足にて突は掾の下には涙をながし。足を取て戴き〳〵。膝に抱付こがれなき向ふて物は言ね共。膽と膽とにこたへつゝしめり。泣にぞ泣（二十三ウ）居たる。

亭主もフツト心付キ。コレ〳〵お初。忘れて居た事が有。観ン音廻り仕やつた跡へ。我ガ身の兄様箱根の三ふ六殿。親達の使イじやといふてわせたが。我身をほしがる者が有と。親達が約束仕られ。三月キ四月キの跡年ンを。立テ銀で隙くれと銀ね持ッて見へた故。其答に約束仕たら明日迎イに来るといはれた。スリヤ我ガ身は今夜は預カり物。途方もない事思やんなと。いへばお初は恟り顔。シヤホンニつがもない。どこの誰やら知レもせぬに。本ンに藪から棒の様な。男持ッとは何ンのこつちや。イヤコレお初。そなたの今いやつたで。此河伊が思ひ当タり。アノ九平次の髭口に。きせるくはへて居やるのは。しつかい藪から棒じやぞや。コレ見立に（二十四オ）違ひは有ルまいと。そこらがらせば図に乗ッて。コレお初の前。心ン中立テは止にして。此九平次になびきやるとマア金銀が沢山ンな。女夫に成気はないかいのと。しなだれかゝるを見るに付ケ。フツトお初が出来心。迚も私等は死る身に。あいつをだまして殺したらせめてもの腹いせと。心に込てコレ九平次様。じやら〳〵した事言んして。跡でいやとは言さぬが。コリヤ本ンタの心かへ。サアせい文ンじや真実じや。ガそなたもそんなら合点ンかと。いふに河伊は耳を引。コレ〳〵九の字。案ンじたより有無なしに今夜からしつぽれ〳〵。おれは亭主や筆都を。相手に奥で呑ミ居ェて。一ッ炬くはへ寝てこまそ。跡でお初とサイナ。色事すれば。徳兵衛むつくり〳〵腹立る。ナヱ。ヲサイナ。徳兵衛（二十四ウ）むつくり〳〵腹立るナヱ。皆こい〳〵と引連て一間の。内へぞ入にけり。

奥口詠め九平次は。そろ〳〵と傍に寄。コレ君様よ。今の様に詞詰メは。実に徳兵衛を思ひ切。おれにあふてたもる気か。サツテモくとんな男じゃと。脊打叩は。ホウ有がたいはコリヤきへるは。そんならちやつと落付キたい。サア〳〵早ふと手を取ば。ふり放してアレ〳〵〳〵。誰レしや知ラぬが門ト口から。うさんな物が覗くぞへ。ドレ〳〵誰じゃ。何者じやと。表へ走り門の戸を。明て方々見廻す内。掾ンの下から徳兵衛をそつと囁二階へと。我も跡先キ見廻して。読で上る檀梯子。ヱ、表にや誰も居ぬのにと。言つゝ這入二階口。お初が上る顔を見て。ハア二階とは（二十五オ）ヤレ粋め。おれもいかふと沓脱へ。上りかゝれば落チたる一ッ通。コリヤ何しやと取上て。お初殿まいる。徳兵衛より。イヤこれは能イ口舌の種と独悦ぶ折も折。ヤア頼たい爰明ケて。早ふ〳〵と戸を叩く。あた邪魔などいつじやと。つぶやきながら戸を明ければ。土手助に挑灯持タせずつと這入れば。

ヤ幸様お出なされたか。ホウ九平次。きつう機嫌か悪そふなが。件ンの事が明ケ兼るか。へ、、銀持か銀で頬はるに。埒せぬ事はござりませぬ。シテお前の方はどふてござんす。サア京都の御用に取紛ギれ。漸〳〵と今夜に成た。スリヤおまへも今夜か。汝は今夜シタリ〳〵。嫁入よし。聟入よし。折て置ケしやん〳〵。声聞キ付て一間より。河伊はとつかは走リ出。ヤア幸様御（二十五ウ）出か。きつい悦びなされ様。サア彼めを今夜埒する筈。ヲ、そふ思ふて預カかつた。金子を持て参じましたと。懐より取出せば。ヲ、気が付て過分ン〳〵。ヤコレ油九いかい世話で有た。イヤ私に何の御礼。残りが有ば四五両も。世話をしたアノ河伊に。力付カしてやらしやませ。ヲ、呑込ンだと悦びの。酒を〳〵と勝ッ手から銚子肴をはこび出す。イヤ酔ぬ中預カりの紙入御戻し申ましよ。コレ落トしたに仕て有印ン判。必出して押スまいぞへ。ヲ、サ合点何の

〳〵と。二人地又取はやす盃に。受た肴中の手をふくも。酔て何やら白紙と思ふに小判の包紙。此詞ヱ、此浜焼キはいたさふな。冀イヤおりや味ふ喰はいの。此ヲ、其味ひでノウ申。印判の言ぬけ様。扨預ケた天神の絵の（二十六オ）すり替様。味ふくはして徳兵衛めを。冀コリヤ其跡はモウいふなと。また若やがす酒盛りの。かざに出てくる手飼の猫。ソリヤとおどせば包紙。くはへて一ト間へ逃ケて行。

此詞肴引れはせなんだか。冀ア、骨ならはよいはいの。此ハテ此仲カ間の者共が。骨盗ンでは済ませぬと。仇口取々成所へ。鎧ウ一間の障子押シ明ケて頬かふりせし侍イが。御間イ申そとずつと出。重ねた小判を引摑ム。ソリヤ盗人めと寄ル河伊。鎧地ハルの苦もなく投ケ付れば。此ウイヤこいつはと立上り。続てかゝる九平次が。鎧小腕を取ッて横様に。脚を蹴返し。頭顛倒。冀コハ狼籍と幸右衛門。立かゝつて顔見合。ヤア長右かと恟り顔。此地ハル九平次もコリヤならぬと。表へ逃ケて戸を明る。十七ウ久右衛門飛ンて出コリヤさせぬはと戸をひつしやり。ヤイ盗人め。アノひかいすな徳兵衛を。（二十六ウ）おのいらがよつてこつてよふむごいめに合したなあ。コレ〳〵長右衛門。まだ合点のいかぬ事も聞た。ソレ詮義してたもいのふ。鎧サア〳〵〳〵其詮義は。此長右衛門が致ます。必おせきなさるゝな。イヤノウ幸右衛門殿。ちよとお目にかゝりたい。是へ出て囉ひましよ。冀ホヲ逢たくばそれへ参ろと。不肖不肖に心の工夫。さらぬ体にて歩より。

詞ノウ長右衛門殿。拙者に用とは何事しやの。鎧ホヲ某が其元に。逢たい用はとずつとより。懐へ手を指込。紙入レを引たくれば。冀ウコリヤどふすると摑ミ付。鎧其手を直に小手なぐり。紙入とつくと改見て。コレ詞〳〵〳〵。此印判は落したと。諸方へ頼の張札して。沙汰に乗た此判が。早ふ御手へ入ましたの。冀サア落したは廿五日。其後に拾ふた者が。戻してくれたが何と

した。雛ハ、、、落す人も拾ひ人も。懇意中でかなござらふ。此（二十七オ）判の吟味仕たら。きよろついて居やつらぐるめ梟が大分泊ろ。併シコレ身が了簡て戻してやる。ソレ大事にかけ持てござれと。紙入共に投戻せば。久右衛門気をいらち。詞ヱ、おも長な事いふていやる。其判を代官所へ。おれが持ッてと立チかゝるを。雛ア、伯父者人御せきなされな。まだ〳〵詮ン義の筋が有。ノフ幸右衛間殿。コレ此金は。貴殿が所持の金子かな。囃ヲヽサ成程。其金は拙者が扶持米。去年ンの冬あいらに売せ。請ヶ取た其金子を。直に預ヶ置たのじやが。夫レが何と致したな。雛ホウ去年の冬預ヶられた此金子に。跡月の廿四日此長右衛門が改メて。包紙にも我手跡で。書付ヶの有は不思儀。コレ此金は先月の末。弟徳（二十七ウ）兵衛へ渡し下されと。其元トを頼んだ金でござるぞや。囃サア渡したらこそ徳兵衛から。請取リとつて貴公へ遣つたは。雛サレバサ。それならば此金は。徳兵衛が手に有リそな物。去年ンの冬からこなたの手には。どふした事で有たのじやの。囃サア夫レは。雛サア何と。囃地ハアはつと計に幸右衛門赤面詞もなかりけり。

傍に二人リの悪ル者は。生た気もなく胴ぶるひ互にそろ〳〵逃て退。雛ヤア待おれと立かゝり。伊兵衛が首筋引とらへ。詞己レはアノ幸右殿に。金の借が有ルといふて。催促仕たはどふじやいへさ。囃ア、イヱ〳〵。夫レはあなたに頼まれて。囃ヤイ〳〵伊兵衛狼狽な。囃イヤ〳〵〳〵コレ幸右衛門様。なんぼにら（二十八オ）しやましても。かふ成ッたらもふ叶はぬ。アイタ、、、、。コレ長右衛門様。モ何ンも角もぶち明ヶましよ。ちつと爰を赦めて下さりませ。アノ幸右衛門様のおつしやつたは。小春を請ヶ出す金に詰ッた。トキニ。よい思案が有ルといふて。カノ印判の工み事。又九平次の存念は。徳兵衛が手に金が有りや。爰のお初が手に入ラぬと。アノ九平次が一番に相談の作者でござります。夫レよりはまだ徳兵衛が大坂の地に

居られぬ様と。預ゲられた雪舟の一ヂ軸を。コリヤヤイ〳〵〳〵。ヤアイ。此九平次が知ラぬ事を。血迷ふて何ぬかすぞい。ヤア知ラぬとは横着物と。久右衛門立かゝり。ヤイ九平次の大ずりめ。己レが工で摺かへた掛物を。サ（二十八ウ）出しおれと胸ぐら取ッて引すへ。ア、コレ〳〵伯父者人マアお待。徳兵衛が借ッた金を。戻して置にやソリヤ言ハれぬ。サア幸右衛門殿。徳兵衛へ渡してと貴殿を頼だ三十両。十五両はコレ爰に有。跡十五両を出さつしやれ。イヤ其金が今はない。ヤアないといふて済そふかと。切刃廻せば。ア、サア〳〵〳〵有〳〵〳〵。コレ九平次。下地に借リも有けれと。聞きやる通りの此難ン義。腰の物でも預けふに。十五両借シてたも。イヤ質物には及ばぬが。御用立ふも爰にはない。ヱ、よごんす。内で取ッて来て借ましよと。逃尻かまへて立上れば。ヤアそりやならぬ。動きおつたら脚切リ折ルぞ。サア幸（二十九オ）右衛門。金はどふじや。サア〳〵〳〵今渡す。まちつと猶予して下され。イヤコレ九平次。アノかふしてたもらぬか。徳兵衛からそなたの方へ。三十両戻る金。其内を十五両先キへ取ッた分ンにして。此十五両請取レば。三十両は済ムといふ物。ハテどふして成リと此場をばいなして囉ふ様に成なら。ヲ、そりや過分。コレ長右。こふして仕廻や徳兵衛が。借リも済ムではござらぬか。ホウスリヤ徳兵衛が九平次に。借リは是で済ミましたの。サアさつぱりと済ンだはいの。ホウ借リが済ンだりやコリヤ九平次。証文ンと雪舟の一軸を今戻せ。サア二色共に内に有。取にござれ渡さふと。言捨にして逃ゲ出す。長右衛門引キ倒し。コリヤ夫聞ふ計リじやはヤイ。其大切ッ（二十九ウ）な一ヂ軸を己が方へ取込で。似物を預たと言かけして徳兵衛を。能人中でぶつたナアト。するりとぬいて鋒打に。りう〳〵はつしと打のめせば。久右衛門は伊兵衛を踏ミ付。思ひしつたか盗人めと。肩腰分ずぶち居る。

長右衛門睨付。ヱ、切ても捨度キ奴等成レど。受ケ取物も有と言ィ他所なれば赦し置ク と。踏飛されて二人リ共。しかんだ頬同士見合て。コレ河伊。平のやの徳兵衛を叩いた罪で叩かれた。アイタ、アイタ、しや本ンに。余ンりで痛おかしいはい。ヤコレ九平次。何の是がおかしい事。サア油虫おじやいのふ。ヤレ待チおれ〳〵。久右衛門が付ていて。手形も掛地も請取ルぞ。サア〳〵うせいと門ト口へ。出ると二人が声をかけ。久右衛門を突キ倒し跡をも見ずに逃ケ出す。ヤア逃た迚赦そふか。待おらぬかといつさんに跡をしたふて追て行。

長右衛門心付（三十オ）与五助参れと呼し。ヤアコリヤ〳〵。伯父者人が気遣ィな。ソレ追付てお供せよ。早ふ〳〵と追立やり。コレ幸右衛門殿。イヤ同道して帰りましよかい。イヤマア先キへ帰らしやれと。心有げに恥らひ顔。ハテ扨最早夜も更ケた。ナニ幸右殿の御家来と。いふに土手助心へて挑灯はき物イザお出と。倶に進て表へ出。ハアこりや雨が降ますはい。何雨が降。ソレ〳〵亭主。幸右殿へ傘をと。気を付ながら懐中より。金子一チ両取リ出し。コレ〳〵亭主。今夜の事は此座切リ。必々沙汰無用。座敷代にと言捨て。戸口へ立出。コレハ扨。幸右殿は早見へぬ。テモ情急な男じやと。傘持ながら長右衛門跡をしたふて急ギ行。

跡に亭主は門の戸しめ。ア、扨もこはや〳〵。コリヤ玉よ。こんな晩は早ふ仕廻ふてもふ寝〳〵。（三十ウ）夫レ釜の下念を入。肴を猫に取ラれなと。言付られてアイ〳〵〳〵。もふ片付て置た物。ドリヤ〳〵寝よふと下女の玉。蒲団敷〳〵独言。扨も今夜はやかましや。したが名代のお初様。あんなもめも皆色故しやなア。色の次手に此帯も。ホ、、、、帯して囉て金もろてヲ、嬉し。いとしい色ときやらのかは。ヱ、つんともふ。大事のもゝをヲ、憎やのと。枕でとん〳〵。テモ

扨も取逃ヵした。ドリヤ次ィ手にイヤもふあす迄こらゑふと。ころりと蒲団打かづき。寝ルより早く高鼾いかなる。
〈夢も短夜の。
八つに成のは。程もなし。初は用意の晴小袖ゆかりは尽ぬ紫の。上ハ着をかざる死出立。同じ思ひに徳兵衛も二階の口より差覗ば。梯子の下に下女は寝ル釣行燈の火は明し。いかゞと案じ。囁て。しゆ（三十一オ）ろ箒に扇を付。箱梯子の二つめよりあふぎ消共きへ兼る。身も手も延しはたと消ば。梯子よりどふど落行燈きへて真くらがり。下女はウント寝返れば。二人は胴をふるはして息キを詰メたる危さよ。
亭主奥にて目を覚し。今のは何じや。女共行燈の火もきへた。早ふ燈せと起されて。。玉はねむそに目を摺々。丸裸にて起キて出。火打箱が見へぬ迚探りありくを。さはらじとあなたこなたへはいまつはる玉かつら二人手に手を取かはし。門口迄そつと出。璞ははづせしが。車戸の音いぶかしく明かけし折からに。
下女は火打をはた〳〵と。打音に紛ラかし丁ど打ば。そつと明。かち〳〵打ば。そろ〳〵明。合セ〳〵て身をちゞめ。虎の尾を踏ム心地して。二人続て忍び出顔を見合セ嬉しやと。死に行身を悦びし哀さつらさ浅ましさ。跡に火打の石の火の命の。程こそ三重へはかなけれ（三十一ウ）

四冊　難波小橋の段　誤リに入物

夜半の空も。かきくもる篠をつく成ル俄雨。往来もたへし浜通り難波。小橋にさしかゝる。
傘のしぶきも片岡幸右衛門。奴が先キに挑灯の光カりも己が心から。立留るとは知ラぬ火の。つく〳〵跡をふり返り。コレサ

お旦那。でつかちないしだらでん。サア〳〵早くおひろひと。先に立テばヤイ土手助。最前から帰れ〳〵と言付ケるに。なぜ先キへ帰りおらぬ。早く帰れ早くいねさ。ナイ〳〵。すりや旦那には。お気合でも悪ルくごはりまするか。お駕でも申付ケませふかな。イヤどつこも悪ルくはないはい。ハア。左様おつしやれても。どふやらお顔持が。イヤサこま言いはずと早く帰らぬか。ハイ。夫レでも其様に。（三十二オ）立留つてごはりますれば。ヲ、サ。天満やでの一チ部始終。町人同前ンの長右衛門めに恥かゝされ。幸右衛門武士が捨つたはやい。我レを帰した其跡で。此道に待チ合長右衛門めを人知レれず。ム、成ル程〳〵。拙ッ者めも聞ておりました。よく御堪忍なされた。高が一チ膳指ても素町人ンの長右衛門。此土手助めに任されなば物の見事に。ナ。死骸は川へ。ハテ。跡で知レても相手は此奴め。旦那には先ッ旅宿へ。更ない内にと言さいて欠出す。詞コリヤ〳〵〳〵。スリヤ何国へ行。ハテ天満やへ参ります。イヤ麁忽〳〵。遊所と言所の騒。彼レが帰りは此道筋。待チ伏セがさい究竟。コリヤ。地色ウかふ〳〵と囁ばうなづく奴が早合点。脱だ羽織を挑灯へ火影を覆ふ石垣の。鴈木に下る横しぶき。地ハル傘傾け長右衛門。（三十二ウ）何の心も爪先キ上り。小橋を半ば行過グる。詞コレ。〳〵待た。と声地色ハルかけられて立留り。詞おれに待テとは。ヲ、おれじや幸右衛門じや。さつきにから待ッて居た。ホウ是は〳〵。此暗いのによふこそお待チ。拙ッ者も与五介めを伯父貴の方へ遣したれば。挑灯はなし俄カの吹キぶり。色町は行燈の火で。挑灯は入ラね共。浜筋へ出ると早夜が更た様に見へまする。京とは違ふて大坂は犬が沢山八間ン屋へ夜深に着時は。迷惑を致しますてや。ハ、、、、。サアお先へと。地ハル進れば。詞イヤ此幸右衛門いなれぬはいの。ハア。そりやなぜでござります。なせにとはしら〳〵しい。中将家の御家来。片岡幸右衛門一チ分ンが捨り申シた。武士の分ンが立タでは。京都へは元トより旅宿ク迄も帰りにくい。お身を待ッて

いたは。一分ンが立テて（三十三オ）貰ひたさ。武士を立テて貰いたい長右衛門。ハ、、、、。扨テはこりや今の内。どこへぞ寄ッて酒でも参ッたか。一分ンのいや。武士が立タぬ故待ッて居たとは。そりや何ンの御一ヂ分ンが。イヤ是々長右衛門酒呑よふな機嫌じやない。天満やの人ト中で。恥頬かいた幸右衛門。今更ラ言フじやないが。身が親幸之進ンが挨拶から。今出川殿のお出入リした長右衛門。其さいて居る刀は。この幸右衛門が親の影。ナ。身共が親父が影じやぞよ。暑さ忘れりや影忘るゝと。繁花の地であのよふに。モウ取返しはならぬはい。身が一分ンの立様の。了簡が聞キたいはい。ハア成ル程。御親ンン父幸之進ンン様の大恩ンン忘れは致さぬ。忘れぬ故穏密にして帰ります。サア恩を知ッたら知ッた様に。取リ捌の仕様も有ルはい。身（三十三ウ）勝ッ手な捌から。一分ンを捨させたそよ。ア申。身勝手の何のとは。コリヤヤイ。徳兵衛はそちが弟。其弟にうつ惚たお初。あいらが為の能ィ様にしたは。身勝ッ手じや有ルまいか。サア夫レは貴方様の。ム、。身共が悪ルいと言事か。ア、何の申。イヤ言フな。恩を知ッたらあゝてばないはい。コレ。此。〳〵さいて居る刀の手まへ。侍の立思案をせい長右衛門。サア〳〵どふじやと。橋板一ぱいふんばたかり。横に出るとはしら化を。押シなだめんと手をつかへ。何事も爰は往還人が聞ケはお為にならぬ。マア〳〵宿へ同道致し。とつくりと思案の上。御一ヂ分は其上でと。あがまへ詞も空吹ク風。鴈木に立聞土手介が。挑灯引さげぬつと出。お旦那の武士が立タねば。此奴めも盛相にはづれるたんべい。今爰で思（三十四オ）案のせろと。跡先キ取まく鰐鯱髭をそらして。罵りける。

長右衛門も二人が吉左右。扨はと思へどさあらぬふり。只手を摺て。申〳〵。お前も拙ッ者も主人の御用に大坂下り。一ヂ大事の用事先同道申て又明日。御一ヂ分も何もかも拙者が胸にと。言ハせも立タず幸右衛門。雨のおやみの暗闇打。まつかう

はつしとだまし切リ。心へ受ケたる傘の辻。詞コリヤ幸右衛門殿何めさる。何めさるとはちよこざいなと。地色奴が段平抜キ打を。ひらいてすまたの切。先は欄干に切込ンだり。

抜カんともがく腕首捻上。ハ、、、。かふ有ふと思ふていた。穏便にしてくれんと。舌を廻せば付上る泥坊めら。中将家の録をはみ。栄耀が余つて悪ル工。ばれ出すからは百年ンめ。刀の手前ひけはせぬ。ヲ、命のすへつた長右衛門。何と成リ共ぬかして置と。（三十四ウ）悪口ながら又一ト打。まつかせ早速の真剣勝負。詞コリヤ土手助。助ケ太刀有ては猶立ぬ。挑灯持て見物せいと。地色指出す明カりを力ラ草。受ケつ払つ橋の上。又ふり頻る雨の音。下は川浪どふ〳〵〳〵。さしもに広き大川の。水に谺の物すこく切つなぐりつ。へ挑しが天罰神罰片岡が。運の橋板つまづいて転ぶ所を乗かゝる。後へ奴が声かけて。旦色那が敵とふり上る。刀の稲妻雨風に。奴が肩先キ大げさ切。

地心しづかに留をぐつと指シ通し。一ト息ほつとつぎあへず。色幸右衛門が日比の積悪。今ン夜の時宜と言ながら。人をあやめて此儘に。活のびん謂なし。御主人への言訳と。地襟押。ぬがんとする所へ。歩やはたして逃ケくるお初徳兵衛諸共橋の本ト。雨の晴間の（三十五オ）月影に顔と顔とを見合セて。詞兄者人か。徳兵衛か。長右衛門様かといふ声も。地色そゞろ震ひの有リ様を。地色つく〳〵見廻し。ム、あはたゝしい其体。地ハル扨テは内をぬけ出たなと。いぶかる内に徳兵衛も傍を詠て。詞ヤア是は幸右衛門。家来迄兄貴の手にかけ。其上に腹をなさるゝ覚悟じやな。ヲ、サ人を殺した長右衛門。助らふ筋はなし。弟さらばと取直す。刀に縋る徳兵衛お初も驚き。マア〳〵〳〵早まつて下さんすな。まつて〳〵と取色縋り。詞宵から段々訳ケ有てかふ爰へ来た品は。九平次に添まい為。徳様も内方へ訳が立タねば。活ては居ぬと言ハしやんす。私も儘に死る気で。地ハル漸内を出たはい

なと。跡や先成ル言訳も涙に。むせぶ計リなり。

長右衛門思案して。ム、そふじゃ〳〵。御主人の御用先キ。此儘（三十五ウ）では死れぬ〳〵。此長右衛門一ト先京へ帰らでは。中将様の手前といひ。幸之進殿へ義理立す。ム、よい〳〵。此長右衛門死ぬからは。そち達チも殺しはせぬ。ハテ幸右衛門主従は。同士打喧嘩といひふらさば。当分ン誼義もかゝるまい。此儘に打捨て一ト先京へ登るに付ケ。徳兵衛が身の上は。是より直に同道して。伯父貴へ預ケて置工面。お初も一ッ所に。イヤ〳〵〳〵。夫レでは済ぬと。うつむいて又も。思案の折も折。すた〳〵走ッて与五介が。挑灯ふり上。ヤア嬉しや。旦那様まだ爰にか。久右衛門様を送り届天満やへ戻たりや。表の戸は打明ケて内は暗し人はなし。引ッ返して参つたと。いふを幸コレお初。何事も此長右衛門が呑込ンだ。今夜の所はコレかふ〳〵。ノ合点か。アイ。夫レ（三十六オ）でも私しやいにとむない。ならふ事なら御一ッ所に。サア夫レも道理じや。そふしては徳兵衛が為にならぬ。おれが悪ルふはせぬはいの。呑ミ込ミやつたか。去リながら。能イ所で逢た故。心ン中に出る二人が命。とゞめたは此長右衛門。人を殺した科人ンなれど。現在の弟徳兵衛や。お初が可愛さに。未練ながらもおりや死ぬ。ハテ命が物種。一ッ寸ン延ればひろい世界。トハいふ物の死ぬまいといふ。誓は幸イ此傘。天満やと書イて有ル。天満は則チ天満神。天ン神の御氏地。天満宮を誓に入リ。長右衛門は死ぬといふ。印シはかふと指つんざき。傘の印シへ血判ンのせいし。サア徳兵衛。お初も倶にと差出せば。是非もなく〳〵両人が友に。染たる。指の血を。血筋の兄が情の露天（三十六ウ）神の社にて。ふたりが浮名を残すとは。身の果知ぬあはれさよ。

長右衛門取リ納メ。コリヤ〳〵与五介。お初を早ふ送ッていけ。ヲ、夫レよ〳〵。天満屋の借シ傘。爰に有ッては後日チの難

ン義。お初も持や。与五介もと。取ッて渡して長右衛門。血汐の傘を徳兵衛とさして。別るゝ。血の涙。ぬれて音をなく時。鳥。只一ト言の暇乞命の末も。短夜の。八つか。七つか時太鼓見付ケられじと西東。近寄ル橋に。コリヤ何じや。ヤア人殺し。喧嘩〳〵と呼はる太鼓を切リ落し。返す刀に挑灯ばつたり蠟燭の。真ン身の兄が思案ン傘。辻を隔て三重

翻刻『本朝斑女簪』正誤表

『同志社国文学』四十号に掲載した『本朝斑女簪』の本文の正誤表をまとめて提出させていただきます。なお、頁数は、本誌四十号の掲載頁です。

頁・行	誤	正
52・14	とこやみの	とこやみの
54・6	先程迄	左程迄
7	料紙硯の	料紙硯の
11	御台所ロの。	御台所ロの
55・1	給ふといへ共。	給ふといへ共
56・3	中山の手に	中山の手に
3	眼をくばって	眼をくばって
8	仰によって	仰によって
61・8	緑の髪	緑の髪
62・5	お願ィにて近江一国	お願ィにて。近江一国
11	参詣したれはこそ	参詣をしたれはこそ
64・4	取つく嶋も。	取つく島も。
5	本国よりの	東国よりの
67・1	木の葉の侍供。	木の葉の侍共。
7	猿轡 猿繋。	猿轡 猿繋。
7	弥生の	弥生の
8	梅若丸。	梅若丸。
15	やつちや〳〵〳〵と。	やつちや〳〵〳〵。

頁・行	誤	正
68・9	顔を二人は	顔を二人は
69・4	引合してくれと。	引合して見てくれと。
12	泊々は	泊〳〵は
69・10	雀目の三郎が	雀目の三郎が
70・12	金作り。	金作り。
71・1	逃しはせじ	逃しはせじ
73・13	目のお為と	者のお為と
74・5	ふじの山成ルかと暫し	ふじの山成ルかと。暫し
78・14	御身のうへを。	お身のうへを。
79・7	禅定と。	禅定と。
81・13	連合ィの	連合ィの
83・3	詰寄給へは	詰メ寄給へは
5	朝日にかゝやく	朝日にかゝやく
9	一思ひに	一ト思ひに
12	若君猿轡にて	若君は猿轡にて
14	若宮いまはの	若君いまはの
15	御遺言背ば	御遺言。背ば
84・1	御しがいを葬て	御しがいを。葬て

頁・行	誤	正
85・15	別〳〵に	別。〳〵に
87・5	身に受て	身に受て
11	すゝむ詞に	すゝむる詞に
88・4	お慰に	お慰に
15	我レ等に中に	我レ等は中に
89・2	調法が	調法が
11	ナント名主殿。	ナント名主殿。
11	お根情から。	お根情から。
13	終には亡る	終には亡る
90・7	のがみの廓に	のがみの廓に
15	酒宴の最中。	酒宴の最中。
93・10	刃音トヤア編笠	刃音ト。ヤア編笠
94・11	殊数。	殊数。
12	家内繁昌	家内繁昌
13	殊勝也。	殊勝也。
97・6	ヲノ待遠に	ヲ、待遠に
98・13	若君と	若君を
15	取出せば、	取出せば。
99・11	生キていると、	生キていると。
100・8	夫妻が	夫婦が

頁行	誤	正
101・7	小脇差。	小脇指。
101・15	囚人（めしうとのもの）駕（のりもの）	囚人（めしうとのもの）駕（のりもの）
101・13	おつ取て、	おつ取て。
101・10	錠（じやう）おろす。	錠（ちやう）おろす。
102・5	駕（のりもの）より	駕（のりもの）より
104・2	鍔（つば）とくつろげ。	鍔（つば）もとくつろげ。
106・3	覚悟のてい。	覚悟（かくご）のてい。
106・7	魂（こん）来ッて	魂（こん）来ッて
107・1	うかへ（中）独（ひとり）寝（ね）て	うかへ（中）。独（ひとり）寝（ね）て
108・1	志（こころざし）。いつのよに	志（こころざし）地いつのよにか
11	かは（調）ヤア珍（めづら）しや	は（調）ヤア珍（めづら）しや
15	打打（色）（まね）き。	打招（色）（まね）き。
109・6	りっぱきらめく	りつぱきらめく
7	御かん気の某。	御かんきの某。
111・5	腕さきに	腕（うで）さきに
112・6	し、たる体に（地中）	し、たる体（てい）に（地中）
12	京の花がたの（スエフジ）	京花（スエ）がたの（フジ）
13	桔梗（ききやう）の前。	桔梗（ききやう）の前。
15	御重宝（ごちやうほう）。	御重宝（ごちやうほう）。
113・3	宿禰（すくね）。（地ハル）	宿禰（すくね）。（地ハル）
114・4	東路（あづまじ）に	東路（あづまじ）に

頁行	誤	正
116・10	二つばくり馬。	二ッばくり（ウ）馬。
116・1	ノウ（調）武介さん。	ソウ（調）武介さん。
9	ヲ、届けて（フン）いが流の。竊（フン）の	ヲ、届（とゞ）けて（フン）いが流の。竊（フン）の
10	打叩（色）（たゝけ）ば。	打叩（色）（たゝけ）ば。
117・3	有しに	有（ハル）しに
15	不遠慮（えんりよ）サア。	不遠慮（えんりよ）サア。
118・15	頂戴（てうだい）有レば。	頂戴（てうだい）有レば。
119・4	ヲ（調）等閑（なほざり）ならぬ	ヲ（調）、等閑（なほざり）ならぬ
119・14	打のめし（色）つかと	打のめし（色）しつかと
120・9	奇妙（きめう）なる。	寄妙（きめう）なる。
122・13	こりやくくと。（色）	こりや〳〵〳〵と（色）
123・6	鉄物（かなもの）。	鉄物（かなもの）
12	意見（いけん）を申上。	異見（いけん）を申上。
15	根性（こんじやう）は	根生（こんじやう）は
125・11	先手右大将殿の（ハル）引（ハル）しめて。（中）	先年右大将殿の（ハル）引（ハル）しめ。て。（中）
126・7	どうかかふか。一心（キン）の	どうかかふか。と。心（キン）の
129・4	騒（さゝぼ）まい。	騒（さゝぼ）まい。
130・8	誰レも（ナヲス）我思ひ子と。	誰レ々も（ナヲス）我思ひ子と。

改行箇所正誤表

改行すべき箇所の冒頭を記します。

頁行	誤	正
131・4	しよていに	しよ（ウ）ていに
132・13	駆（はせ）色来り。	馳（はせ）来り。
133・13	心斎橋本四丁目	心斎橋南四丁目

頁　行

79・1　地（ウ）富士の高根の霞（かすみ）のまに〳〵

82・15　地（色）ノウ（ハル）嘆キをかけじと自ラこ隠（かく）しやつても

84・2　ヤア（調）三郎。さほど（四十才）けつばくなる

84・4　ア（調）、暫ク御待下さるべし。吉田のお家へ忠義のすじ。

89・1　ム（調）、せいのひくいは聞へたが。見れは手足も

93・5　地（ハル）サアしてやつたと蛸（ウ）ひつたくり。竹の枝に打かくれは

114・12　申（調）〳〵お待イ様。お召なされてござんすは

119・12　地（ウ）跡には与五八。門（ハル）の戸こぢ明つ（色）、と入。

120・5　イヤ（調）ちんじても（八十二才）のがれぬ所。

123・7　ス（調）リヤ妹を御台所にして。受取て下さるか

本正誤表は次の翻刻の会の会員が作成した。

清水唯由、石川千里、小林美奈、岡嶋弓恵、亀井佐代子、鶴原利恵、谷地舘和賀子、渡辺千尋、荒井智美、鈴木亜矢子、谷畑恵美、冨川亜希子、水谷友香、山田和人。